

「俳句の小径」と石田波郷

校長 玉井 啓二

正門から本校に入り、すぐ西に（校舎に向かって右に）進むと「俳句の小径」があります。この「俳句の小径」では、入り口から西に進んでいくと順に、次に示す句碑を見ることができます。

- ① をさな等は海に蛍につかれ寝る 石田波郷
- ② 若鮎の二手になりて上りけり 正岡子規
- ③ をりととりてはらりとおもきすすきかな 飯田蛇笏
- ④ 朝鵪ニ夕鵪ニかすり織りすすむ 村上霽月
- ⑤ 青林檎子が食い終る母の前 石田波郷
- ⑥ 春風や闘志いだきて丘に立つ 高浜虚子
- ⑦ 梅一輪一輪ほどの暖かさ 服部嵐雪
- ⑧ 花木槿家ある限り機之音 正岡子規
- ⑨ げんげ田や花咲く前の深みどり 五十崎古郷
- ⑩ 子の摘める秋七草の茎短か 星野立子
- ⑪ 秋いくとせ石鎚を見ず母を見ず 石田波郷



いずれも松山に縁のある有名な俳人の代表的な俳句です。そして、これらの俳句の一つ一つには、子供たちに対する願いが込められているように思います。例えば、①・⑤・⑩からは「自然の恵みや親の愛情を受けて健やかに育ってほしい」という願いが、②・⑥からは「大きくなっても元気でたくましく活躍してほしい」という願いが、③・⑦・⑨からは「様々なことに価値を見出す感性を身に付けてほしい」という願いが、そして④・⑧からは「いつまでも垣生の風景や伝統文化を大切にしてほしい」という願いが伺えます。

これらの句碑の中で、石田波郷のものが①・⑤・⑪の三基と最も多くあることに気が付きます。波郷は、自身の俳句がこれまでに小中学校の国語の教科書に掲載されるなど全国的に有名な俳人ですが、1913年（大正2年）に垣生村西垣生（現松山市西垣生町）で生まれていて、なんと本校の卒業生です。著名な俳人の中でも波郷の句碑が最も多いのは、垣生に生まれた波郷に対する垣生の人々の特別な思いの表れでしょう。波郷の三基の句碑の中でも⑪は、上の写真のように「俳句の小径」の句碑全体で唯一の石碑（他は木製の碑）であり、最も奥（西）に位置しています。記録によるとこの波郷の句は、昭和36年11月に母が危篤になったとの知らせを受け、松山に帰省した際に詠まれたそうです。この時、母は73歳、波郷は48歳でした。

私は、昨年度末の3月26日に、前任の須之内靖彦校長先生との引継ぎのために初めて本校を訪れた時、最初に「俳句の小径」を通りました。そして、⑪の句碑の前に佇んで石碑に刻まれている俳句を目にした時、私は涙があふれるほどの感動を覚えました。というのも、「見ず」という言葉が繰り返されることで、何年も帰省できずに母に会えなかった波郷の後悔の念が胸に迫ってくるように感じられたからです。また、「石鎚」と「母」を同列に並べることで、波郷にとって母がいかに懐深く大きな存在であったかを感じ取ったからです。

ちなみに副碑には、「石田波郷はわが西垣生の里に生いたち若くして上京。俳句の研究と句作に精魂を打ちこみ病と闘いつつこの道ひとすじに生きて、昭和俳壇に不滅の光を放った。永くその偉業を称えるとともに後進の奮起精進の指針としてこの碑を建つ。」と記されています。石田波郷は、伊予絃の鍵谷カナ、俳句の村上霽月らとともに「垣生が輩出した偉人」と称えられますが、この副碑からも往時の方々の波郷に対する尊敬の念や誇りに思う気持ちが伝わってきます。子供たちはもとより、保護者の方や地域の方、多くの方々が「俳句の小径」を訪ねられ、「垣生は、歴史的にも文化の薫り高い校区である」ということを感じていただきたいと願っています。